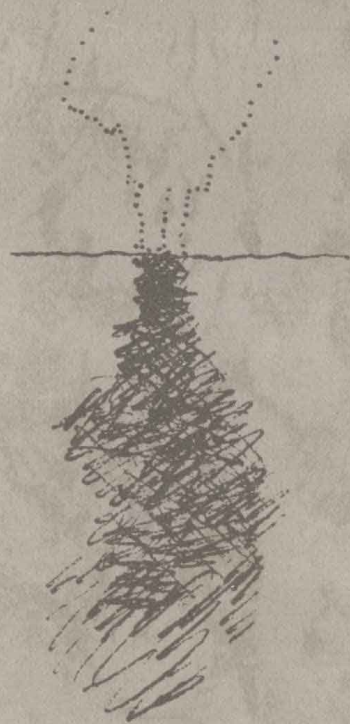




清水哲男 宮原昭夫 岡本おさみ 林静
 鈴木志郎康 東野芳明 嵐山光三郎 黒田征太郎
 豊田有恒 山下洋輔 小中陽太郎 高石ともや
 なたいなた 相田勉 注島伴 早乙女勝元 木卓
 大食舜 人島渚 村島健一 今江祥智
 山本邦山 加堂秀一 滝田ゆう 河野典生
 友竹正則 利根川裕 後藤明生 長瀬太
 佐江繁 藤本義一 横尾忠則 松永仙
 龍沢左保 嶋岡辰 荻昌弘 風間完
 田中実昌 中村武志 平野威馬雄

ぼくの子育て日記



婦人画報社

ぼくの子育て日記 ©

昭和五十四年七月十五日 初版発行

定価 八〇〇円

著者 藤本義一と39人

発行者 本吉敏男

発行所 株式会社 婦人画報社

〒106 東京都港区西新橋二ノ九
電話 東京(五〇一)六二二一(代)
振替口座番号東京二四〇〇二〇番

印刷所 大日本印刷株式会社

ぼくの子育て日記◎目次

序・父親愚考へ40人の親父にかわって	藤本義一	6
--------------------	------	---

I 幼児、幼稚園児篇

清水哲男	保育園朝のわかれ	12
------	----------	----

宮原昭夫	架空の家族に囲まれて	18
------	------------	----

岡本おさみ	子連れの旅	27
-------	-------	----

林静一	パパとおじさん	33
-----	---------	----

鈴木志郎康	父の思い入れ、子と関係せず	43
-------	---------------	----

東野芳明	二十一世紀に噛みつけ	52
------	------------	----

嵐山光三郎	団地ぐらし	61
-------	-------	----

黒田征太郎	海太郎と海音子	70
-------	---------	----

豊田有恒	なんでも見せてやろう	79
------	------------	----

II 小学生篇

山下洋輔	我田引水即興育児	90
------	----------	----

小中陽太郎 ほめる、三原則 99

高石ともや 若狭ぐらし 106

なだいなだ すじがきどおり? 115

和田勉 子を思うゆえにわれあり 121

江島任 父と子の玩具戦史 126

早乙女勝元 実践的資源再利用教育 132

三木卓 父と娘と病氣 138

大島渚 子供の舌は男の責任 144

大倉舜二 一人っ子の娘 150

村島健一 親父と息子は友だち? 157

Ⅲ 中学生篇

今江祥智 父一人娘一人 164

山本邦山 音まかせ 170

加堂秀三 信じて待つちから 175

滝田ゆう

手土産買ったりしてからに……

183

河野典生

スパルタ式放任教育……

189

友竹正則

後ろめたさの記……

198

利根川裕

恨みの進学塾、しかし……

203

IV 高校生篇

後藤明生

親父の流儀……

210

長新太

黒幕は誰だ……

219

佐江衆一

子供より自分が大事、と思いたい……

224

藤本義一

人生に公式はないが……

233

横尾忠則

神様から預けられた子供と……

243

松永伍一

わたしは孤独な王様か……

252

笹沢左保

父と子に對話は必要ない……

261

嶋岡晨

運命の海を泳いで……

270

荻昌弘

『子育て日記』の話……

280

V 大学生、大人篇

風間完 わたしは検査役 292

田中小実昌 どうして？ 親父の涙 298

中村武志 息子の嫁 304

平野威馬雄 かもねぎと似顔屋 311

VI 子供たちからのメッセージ

祐乗坊健 ぼくのおとうさん 320

早乙女民 やさしくてこわいおとうさん 322

今江冬子 たとえば、お酒 324

平野レミ 父のこと 326

本書は、月刊『婦人画報』に1975年1月号より1978年12月号まで連載されたものから40回分を収録したものです。

装幀、挿画・杉浦範茂

序・父親愚考〈40人の親父にかわって〉

藤本義一

四十人の、ぼくも含めての親父たちの子育て論を読んでいると、父親というのは、なんとも眞面目を照れで隠しながらも、なお權威失墜のぎりぎり一杯の土俵際で踏んばっている様子が窺えるのだ。

父親になることが、母親になることよりも、ずっと低い位置づけのような気になる。一種の狼狽で父親になり、一生懸命に振舞えば振舞うほど滑稽になり、やがて哀しき物語になっていくのがわかる。

この本に、もし、サブ・タイトルを付けるなら、

——父親・やがて哀しき記集。

とてもやるだろうという考えをもった。

そして、父親という二字を眺めていると、父という字は、両手に鋏か鋤を握り締めている男の像を連

想し、親という字を眺めていると、いつの間にか、これが三分にバラバラの状態になり、立・木・見という独立した三文字となり木の上に立って見るのが親という字ではないかなどと考えてしまうのだ。すぐにでも原稿用紙に向って筆を執り、書き出せばいいものを、約束の期日過ぎても書けないのは、どうも、ばく自身が、この二文字に拘泥^{きんねい}つていたためらしいのだ。

父と子は、この二文字の独断の解釈でわかりきったような気になった。

これではいけない。約束の三千二百字はなんとかしなければいけないと思いつつ、以前に読んだアメリカの心理学者、スターチ教授の本を捜し出そうとしたのだが、これがまた見付からないのだ。

だから、うる覚えの教授の『人間の欲望』についての考察を頭の中に薄ぼんやりと思い浮かべながら、筆をすすめていこうと思うのである。

教授は、欲望を順位にいくつか並べておられたが、第一位は食欲であり、第二位——これが問題だが、母性愛だった。そして、第三位、健康。第四位、性愛。となっていたように思う。

父親の場合、第二位は逆立ちしても自分の手には入らない。これがどうも母親の範囲に近付けない大きなハンデだと思われる。母性愛というのは、なにかもを大きく包んでしまうものだ。海という字の中にも、母が入っている。それに、母なる大地ともいうではないか。包容する度量、容器、それが母である。だから、袋であり、オフクロなのだろう。

これに対して、父親は、なんと頼りない存在なのだろう。

これが、かのA・ビアスの『悪魔の辞典』となると、さらに滑稽にして残酷な判決が下されるのだ。

男とは——取るに足らない、もしくはさして重要でない性を構成する一員。人類の男性は（女性のあいだでは）一般に「単なる人間」として知られるが、この種族には、家族に衣食を十分に供給する者と

不十分に供給する者と——この二種類がある。

となっている。

父親は、ますます薄っぺらな存在になっていくだけなのだ。

こういう中であって、父親は、父親としての立場よりも、より根元的な男の立場を固持しようとして、涙ぐましい努力をつづけているのがわかる。ある父親は、常に、己に向っている。『不惜身命』フシヤクシンミョウと唱える。愛は惜しみなく与えるべきものだとか心がける。これなどは、男が母性愛をもつことが出来ないがための言葉の遊びのような気もする。

ぼく自身、二人の子供の父親として、やはり、女房に大きなハンデがついているのがわかる。

今年などは、上が大学受験で、下が高校受験であった。

女房は、平然としている。

「やるだけやって、駄目ならば、それでいいじゃないの。でも、あんたなら、出来ると思うわ」

実に、現実には即した暗示である。まるで、野球の監督が試合前に、ダッグアウトという宣言のようなものだ。

だが、父親のぼくとしては、女房のような宣言は、どうしても出来ない。

「君なら出来る」

といって、失敗した時に、子供たちに、なんの言葉を渡してやればいいのか。やるだけやって、駄目なら、それでいいではないか、というのをいってやるのも、なんとなく残酷な気がして、黙っている。一体、こういう時に、どうやって激励したらいいのかと迷ってしまうのだ。なんとかと思っても、容易には出来ない。

やってやるのが出来たのは、子供に色紙を書いてやるぐらいのことだ。

——君のグラスは

空っぽだ

その中に血を注げ

夢を満たせ

父なる人・義一

と書く。父なる人と書くあたりが、父親の照れであるとはよくわかる。が、そういうふうにかざるを得ない。

そして、地方に取材に出た時に、不図、受験祈願のためのお守札を買ったりする。九州の太宰府の札だったり、高僧から小さな数珠を受けたりするのだ。そんなことが、どれほど子供たちにプラスになるかはわからないが、父親の存在を、なんとかして示そうとしているのだ。

そして、受験前夜、ぼくは三十年近く前の大学入試の夢を見る。悪夢だ。盗汗びっしょりだ。

翌日、この夢の話を子供とか女房にはいえない。なんとなく気羞しいのだ。といって、黙っているのも苦しいという妙な気持ちになってしまう。

そっと、アシスタントの女性にいう。その女性から、子供や女房に伝えられることを期待しているのだ。はたして、彼女の口から、子供や女房に伝えられるが、その結果は、無残である。

「ハッハッハ、お父さんが受けるわけではないのに……」

とか、

「お父さん、相当、成績が悪かったんでしょ」

などといわれるのがオチなのだ。

女房に至っては、これをテレビのブラウン管で公表してしまい、視聴者の失笑を買う始末だ。

やはり、母親は、自分の腹を痛めて産んだのだという誇らしげな気持を抱いているのだが、父親には、これがないから、あれこれと思惑つたりしながら、照れに照れた挙句に笑いの対象にされてしまっているのである。

それでいて、父親は、常に、父親でありたいと念じるのだ。そのために、ある父親は財産や職業を子供に継承させようと働くが、これはまだ単純でわかりがよいものである。大半の父親は、精神的なものを子供に植えつけるのだといい、それは、父親の生きざまを見せてやることなどといい、酒を飲んでいるのである。

いい気なものだ。

男は永遠にロマンを求めつづけているのだなどという。これもまあ、よく考えてみると隠れミノのようなものかも知らない。

ばくも、また、その一人なのだ。家父長制度の中でなら、ピラミッドの頂点、大黒柱と居直つていても図になるが、現代では、それも笑われると、父親は、孤立の状態の中で肩を張り、やさしく父性愛を注ぐうとして拒絶されるや、今度は、頑迷固陋の見本のような男になったり、酒やギャンブルに男らしさを誇示したりするものだ。

父親は、子育ての中で、やがて哀しき存在ではなくて、やはり哀しき存在のようである。

へ1979年 初夏

I
幼兒、幼稚園篇



保育園朝のわかれ

共稼ぎ夫婦にとって保育園での朝のわかれはつらいものでも、考えようによっては、保育園は集団生活になじむ最高の場、と心を鬼にする親心。

清水哲男

詩人 1938年東京生まれ、京大卒。著書に詩集『水鏡座の水』『野に、球。』『雨の日の鳥』ほか。

「ワンパクでもいい。たくましく育ってほしい」というテレビ・コマーシャルがある。なかなか評判がさうらしい。

評判がいい理由は、おそらくこのコマーシャルに登場する父親が、はっきりとした教育理念を持っていることに関係があるのだと思う。単純明快にすっぱりと、「ワンパクでもいい。……」と言い放つところに、世の親たちは無上の羨望の念を覚えてしまうのである。このことを裏返して考えれば、それほどに現代の親たちは、子供をどう育てるべきかということについて、自信がないということになる。子供の前で、右往左往しているということになる。

むろん、親たちの右往左往には根拠がある。それを一言で言えば、いまの親たちが生きてきた戦後社会は、どんな意味からにせよ、価値観の動乱期とでもいうべき時代なのであったから、あらゆる価値を相対的に見るということについては敏であっても、確固とした価値意識を保持するというようなことには、臆病にならざるを得ないということだろう。だから、「ワンパクでもいい。……」などと自信満々

に言われたりすると、「ホウ」と溜め息まじりに感心したり、羨んだりしてしまうのである。そしてもちろん、ぼくもそんな親たちのひとりなのだ。

もつともぼくの場合は、女の子の父親だから、「ワンバクでもいい。……」ということにはならないのだけれども、いずれにせよ、テレビ・コマーシャルに出てくる父親のように、子育てについて自信満々にはなり得ないということで、事の本質は同じことなのである。娘をどういう女性に育てようかなどと、考えたこともないというほうが正しいかもしれない。

*

娘の名は、みぎわという。まもなく、四歳と九ヵ月になる。彼女は、毎日近所の保育園に通っており、親に似ず少々太目ではあるが、まあどこにでもいる女の子といった感じだ。ただ普通の女の子とちよつと違った生活があるとすれば、週末になると新幹線に乗って大阪に行くということくらいだろう。毎週末、母親が大阪でピアノを教えるという仕事を持っており、生後六ヵ月くらいから、彼女は母親といっしょに大阪通いをつづけているのだ。余談になるが、娘くらいの年齢で、これほどの頻度で東海道を往復した例は、日本広しといえども、そうザラにはないのではないかと思う。むろんこんなことは、わが家の生活の貧しさを象徴しているのであつて、自慢にもなにもなりはしないのであるが……。

さて、娘を保育園に通わせている動機にはふたつある。

そのひとつは、言わずもがなのことであるが、夫婦共稼ぎという主としてわが家の経済状態からくる絶体絶命の理由だ。零細文筆業者であるぼくには、一家を支えていくほどの収入がない。そこでどうしても、妻が働きに出る必要が生じてくるのであり、その間、娘は誰かのお世話にならざるを得ないことを、生まれたときから運命づけられていたというわけである。

みぎわが入園したのは、一歳半のとき。まだおしめがとれず、ヨチヨチ歩きの段階で、送り迎えには乳母車を使った。二十分ばかりかかる送り迎えには、朝は妻が行き、帰りはぼくが迎えに行ったが、ときにぼくが送りに行く役まわりになることがあり、そういうときは正直に言ってつらかった。人見知りの激しい赤ん坊だったので、園の先生と受け渡しをする際に、必ずと言っていいほど、娘は大泣きに泣いたからなのである。なんだか、いやがる子供を無理矢理に人買い(?)の手に渡す、鬼のような父親という気分がしてきて、いつそのことこのまま二人で家に引き返そうかと思ったことは、何度もあるという始末だった。当時の保育園との連絡帳をくつてみると、やはりメソメソ泣いてばかりいたようだ。

某月某日。今日、はじめて二時間眠りました。保母が傍にいないと不安らしく、おしめをかえる間じゅう泣いています。

某月某日。朝、お母さまとわかれるとき、泣いていましたが、後で静まりました。昼食はあまり欲しくなく、汁はよろこんで飲もうとしましたが、半分くらいこぼしてしまいました。ベッドで午睡に入り、めずらしく静かに寝つきました。が、目覚めてしばらく黙っていたと思ったら、突然「ワーン」と泣きだしました。

某月某日。庭において運動会の練習をしました。最初はびっくりして泣いていたみみちゃん。はとぼつぽの体操のころから落ちついて、とんだりはねたりしたのですが、席にもどるときにころんで、また「ワーン」。「元気にいちに」の練習はできませんでした。

ざっと、こんな具合である。なにかにつけて泣き虫だったというわけだが、朝のわかれをいやがるこ